# 碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可
神奈川　碩心会　発行

59年11月号（148号）
発行者
根岸岳萃
編集
中村愛岳


59年11月現在会員数

| | |
|---|---|
| 逗子地区 | 170名 |
| 葉山地区 | 298名 |
| 大船地区 | 66名 |
| （合計） | （534名） |

## 作者の気持ちを理解

長柄支部　礒部　誠風

秋たけなわとなりました。朝の陽をいっぱいにあびて、赤、黄、緑と色鮮かに輝く山々の景色を眺め、小鳥のさえずり、松の枝を鳴らす風の音を聞いていると、コンクリート社会の都会と、車の騒音で疲れた頭を鮮明にしてくれます。

この景色とは裏腹に、暴走族、校内暴力等、耳を塞ぎたくなるようなことが、新聞・テレビ等で報道されますが、青少年には今モラルを教える時期にきているのではないでしょうか。根岸会長が言われるように詩吟には良い言葉の文句はあるが、悪い言葉の文句はないと教えられましたが、その通りだと思います。小・中学校のホームルームの時間か、ちょっとした時間に、詩の作者の気持ちと、吟を教えたら青少年の犯罪も減るのではないでしょうか。

私の父親は太平洋戦争の末期に海軍に召集されました関係からか、軍神広瀬中佐の詩が好きです。魚雷を受け、沈みゆく戦艦の艙内を、杉野…杉野…と戦友を探し求め呼ぶ姿に心が打たれます。今後も作者の気持を理解して吟道に励みたいと思います。

晩秋の古都

## 〃鎌倉散策のさそい〃

秋も深まり今年も残り少くなりました。日頃の運動不足の解消、身近な古都の歴史探訪、吟友同志の親睦…そんなような目的で、身近で気軽な散策を有志で思いつき実行してみようかと思い立ちました。参加御希望の方は昼食持参、軽装で御参加を。

（と　き）

11月28日（水）雨天の場合は中止

（集合場所と時間）

鎌倉駅西口（裏駅）9時30分

（主なコース）

鎌倉駅西口 ＝ 佐助稲荷 ＝ 銭洗弁天 ＝ 葛原岡公園（昼食） ＝ 葛原岡神社・日野俊基の墓 ＝ 化粧坂 ＝ 平景清窟 ＝ 阿仏尼供養塔 ＝ 海蔵寺（底脱井戸） ＝ 岩船地蔵 ＝ 薬王寺 ＝ 浄光明寺 ＝ 英勝寺 ＝ 寿福寺（実朝・政子の墓） ＝ 鎌倉駅

鎌倉は三方を山に囲まれているために、他の地方に行くには山を開拓して作った〃切通し〃を通らねばならない。コース中の「化粧坂」も〃鎌倉七口〃と呼ばれる切通しの一つです。今回は秋を訪ねるにふさわしいコースをえらんでみました。

（発起人・中村・秋元）

# 全国大会長野吟行

堀内支部A　白井　寿風

（十月十三日）地蔵寺山を登りながら、さきほど記念館で拝観した諸資料を思い出し、繰り返し祖宗範の事績をしのんだ。大正末期まで、吟詠の定型らしいものはまだなかった。祖宗範は、昭和初年から全国各地を行脚し、吟詠の基礎作りと、その普及開発に献身された。その足跡は国内はもちろん、朝鮮、満洲、中国に及び、すさまじい詩吟一筋のご生涯であった。祖宗範はまさに、日本詩吟界の開拓者であったのだ。

資料の中から先生のプロフィルを二題

◇　いつもかすりの着物に黒紋付、袴という一見国士を思わせるいでたちで、にこにこと会場へ

◇　先ほどから書き物をされている。一段落すると、やおら袴を脱いで丁寧にたたみ、脇の方へ片づけ、ゆっくりトイレへ、しばらくして出て来ると、再び袴をつけて、また机に……

見晴台上、祖宗範と夫人の墓前並びに吟魂碑に対し、一同「神州」を合吟し、深く深く合掌。

（十四日）第86回全国吟道大会に、神奈川県勢は堂々バス六台を連ねて長野県県民文化会館へ。県外団体としては断然第一位の人数である。会館は、神奈川県民ホールに匹敵し、なお、正面広場、駐車場等はさながら公園の感がある。大会次第は割愛し、圧巻は長野県本部の二五〇名と、団体最終を飾る本県二二二名の大合吟であった。

コンクールは10人23組。昨年の優勝は神奈川であったが、今回は福岡県（女子）が優勝杯を手にした。

コンクール講評メモ（抜粋）

1. コンクールは教本の吟符どおりがよい。
2. 洋楽ではないので和装の方がよい。
3. 指輪を両手につけていた者あり、不可

（十五日）バスはリンゴ畑の間を縫うように、また、千曲川沿いに松代町へ。車中ガイドが佐久間象山でなく象山が正しいとの説明あり、早速客席から反対意見が出てガイドは目をパチクリ。松代町は自由行動で一同象山神社に参拝、社前で「漫述」を奉吟。緑の象山はすぐそばであった。

午後は真田十万石城下巡りを楽しんだ後、千曲川沿いに小諸市へ。晴天に恵まれ旅情満喫。小諸城趾（懐古園）は、月曜日にかかわらず学生の団体でにぎわっていた。

われわれの審査課題となっている「小諸なる古城のほとり」「千曲川旅情のうた」の二編は、ともに藤村二十八歳の時の作。新体詩の絶唱と称されるばかりでなく、明治における新体詩を、これによって芸術の域にまで高めたのであった。城跡はまさに、「去らんと欲して低回去る能わず。」

上毛三山の一つ、妙義山の奇峰を眺望し終えたころ、窓外はもう暗くなっていた。

## 59年度　指導者吟道講座終る

59年10月28日、平塚江陽中学校講堂に於て有意義に行なわれました。午前9時受付に始まり午後4時30分迄、50分の講座から講座への休憩時間わずか5分というきびしい時間割でしたが、皆さん早朝より最後まで熱心に講義に耳を傾け、出席率も大変よかった。　講師・講座は左記の通り。

覚張岳璟（絶句）易水の送別・爾霊山
安孫子岳晴（律詩）獄中感有り
草野岳穣（新体詩）千曲川旅情の歌
根岸岳萃（和歌）晴れてよし・真木ふかき
新田岳悠（俳句）菜の花や・荒海や・他
常盤岳湘（講義）指導者の心得・他
松井岳洋（韻読）啾々吟・他

（敬称略）

# 文化の日に

堀内支部A　上村　象風

文化祭の朝、小学二年生の娘に「文化ってなあに」と聞かれて、はてと考えてしまった。

昔からの文化遺産として、詩や和歌を今私達が吟ずることの倖せ、文化って人間の心の中にあるゆとり、あそびではないかなって気がして、毎日毎日一生懸命働らき、生活に追われてふとある時に我にかえる。その時自分の置かれている立場や、苦しさや、楽しさを言葉のあそびで歌に詠み、又詩にして自分自身の心のゆとりとして楽しむ。又先人の残された詩文を味わいながら自分なりに節を付けて楽しむ…これも心にゆとりがなければ出来ない事です。

毎日の生活の中でも心にゆとりがなければ、家の中もギスギスした生活になるでしょう。多少の無駄や、あそびのある生活こそ、楽しい人生になると思いつゝ文化祭に出掛けました。

今日も一日無事に「吟じ終りて清風起る一吟天地の心」…そんな気持ちでこの原稿を書き終りました。

（葉山文化祭詩吟詩舞の会を終えて）

逗子市文化祭

# 詩吟・詩舞発表会に参加して

真澄支部　星野　輝山

菊の花薫る十一月三日文化の日、第34回逗子市文化祭「かながわふるさとまつり参加」詩吟詩舞発表大会が、逗子図書館ホールに於て開催されました。雲一つない快晴に恵まれ、会場は満席という盛況のうちに逗子在住の各流派の方々が、日頃の修練の成果を発表されました。当日九州の大会に出立される松井岳洋先生の「東坡赤壁図」は心に泌み入るものがありました。各派ともども熱吟に次ぐ熱吟で、大変勉強になりました。恒例の会の事とて顔馴染みの方も多く、和やかな雰囲気の裡、日本の伝統を誇る書道・華道・吟道の渾然一体となった立体吟に感動致しました。石津先生のお姿の無いのが誠に淋しい事でした。見事な詩舞「逗子八景」も大会に華をそえました。役員先生方の吟は、さすがに満場を打つものがあり、吟道に対する情熱を新たに致しました。

# 三勿歌（みもちうた）

水野　豊洲作

以目見勿須心見　以耳勿聞須心聞
以口勿言須心言　親形疎心迷且昏
夫明明徳先正心　心正百般日日新

目を以って見る勿れ　須らく心を以って見るべし（すべか）
耳を以って聞く勿れ　須らく心を以って聞くべし
口を以って言う勿れ　須らく心を以って言うべし
形を親しみ心を疎んずれば迷い且つ昏し（うと）
夫れ明徳を明らかにするは先ず心を正しくす
心正しければ百般日々新なり（あらた）

（大　意）

人の頭に立つ責任ある地位につく人の心がまえを説いたもの。人の頭に立つ者は、形にこだわれば庶政あがらず、古い聖賢はこれを慎んだ。世界百般に処して心をしなければ、事をあやまることがない。

（作　者）

水野豊洲（明治十九ー昭和三十二）元、司法理事官、幼少より和田儲斉より漢学を学ぶ。後文学博士三島中洲の二松学会に学ぶ。平易な詩詩吟法をもって独自の風とし、自作のほか漢詩の翻訳も多い。七十二歳で没す。

## 練吟メモ

○大分前のことだが、NHK「題名のない音楽会」で、民謡黒田節の旋律が、雅楽曲の越天楽（えてんらく）の旋律に大変よく似ていることを、オーケストラと雅楽でそれぞれ紹介した。

○黒田節は、もともと筑前今様の「黒田武士」を、大正末期に民謡の「黒田節」に変えたもの。吟友の皆様よくご存知のとおり、旧黒田藩の武士達に愛唱された歌で、旋律は越天楽からとったが、元歌の「酒は飲め飲め」はじめ、現在の歌詞のほとんどは旧黒田藩士の作であるという。

○今様（いまよう）は、今様歌の略。平安中期から流行した、当時としては新様式、いわゆるはやりの歌であった。和賛や雅楽を背景に、歌詞を平易な七五調四句でまとめた。当時、宮中はじめ上流階級でよく歌われたが、おいおい白拍子や一般民衆の口にされるようになった。

○ところで、平安時代の雅楽曲は、唐楽だけでも百曲ほどあるが、そのうちおなじみの曲名を二、三掲げると、まず（万歳楽）これは、天皇即位の時は必ず行われる。次に（天人楽）（長生楽）（想定恋）などがあり、おかしいのが（五常楽）、失礼ながら人生を半世紀以上過ごされた方々はお分りのように「あののんきな後生楽め、大分おめでたいよ」と、友人を嘆かせ、また、（太平楽）は「やつ、太平楽並べてるが、大丈夫かな」と仲間を心配させたりで、結構大衆に侵透した曲名である。そしてご存知「千秋楽」江戸においては歌舞伎興業の最終日、太夫元が必ずこれを舞ったことから始まり、やがて相撲興業にもこれを使用するようになった。

○さて、越天楽のルーツをさぐると、そのむかし、印度や西域から、これもNHKでおなじみのシルクロードを経て唐へ、やがて唐楽として日本へ輸入され、雅楽となった。

お巡りさんはノド自慢

## 横須賀署員が詩吟で老人ホーム慰問

横須賀署（荒井時次郎署長）は、恵まれないお年寄りを励ましそうと、このほど同署の詩吟愛好会のメンバーや外勤課員ら20人が横須賀市衣笠栄町の老人ホーム「共楽荘」を慰問した。

同施設の大広間には約100人のお年寄りたちが一行を熱烈歓迎。須田英作同署副署長から将棋セットや碁セットがお年寄りにプレゼントされた。この後、広間の舞台で詩吟大会。同愛好会の師匠格、小形雄一警部補が詩吟「老人讃歌」を指導、引き続き外勤課や防犯課の署員六人が、得意のノドを次々と披露、日ごろのいかめしさとはうって変わったお巡りさんの熱演に、お年寄りは大喜び。この日、詩舞愛好の女性数名も友情出演し、見事な詩舞を披露し花を添えた。

（59・10・23　毎日新聞より）

（入　会）

667 片岡房子　横浜市戸塚区上倉田町五七三
（大船A）（電）〇四五ー八八一ー二三六一

668 松岡義則　横浜市戸塚区上倉田町五七三ー一
（大船A）（電）〇四五ー八八一ー〇七五三

669 鈴木保雄　海老名市国分寺台三ー九ー六
（横　警）（電）〇四六二ー三二ー八五八八

670 堀口蔦枝　鎌倉市稲村ケ崎五ー二三ー六
（大船A）（電）〇四六七ー三一ー三三八四

671 服部きく　逗子市逗子七ー一三
（真　澄）（電）〇四六八ー七一ー七七二〇

（退　会）

187 小森香風（一色B）
625 神尾よしえ（桜山B）
323 草柳美泉（桜山B）